NVC Monthly

同好会ニュース

寝屋川映像同好会会報
第５１号（２０１３０９１３）
発行　竹 田 幸 男

谷　弘子さん「大自然のパノラマが待っている立山」より

例会の窓

■ 平成２５年９月例会

日　時　平成２５年９月１３日（金）
　　１３：３０～１６：３０
場　所　寝屋川市民活動センター
　　４階　ワーキングスペース

出席者：天野　新井　石田　小林　佐伯　竹田　谷　冨田（50音順・敬称略）
欠席者：２名

例会次第
１．各会員の最近の活動状況･情報交換
2．報告・連絡・協議事項
（１）NVC　Monthly９月記事筆者の件（佐伯さん）

（２）大阪アマチュア映像祭　　１０／２０（日）
・今年は新井･竹田作品　多くの会員の観覧をお願いします。
・プログラム配布　9月19日

（３）文化連盟会員親睦研修会　１０／７　申込者なし。

（４）市民文化祭作品は
・今日作品の提出日　忘れた人は20日までに竹田へ。
新井さん「かたな博物館をたずねて」
谷さん「当尾の石仏巡り」

（５）ふれあいフェスタ対策
・11月9日市民会館４F決定。
・今年の映像協会のテーマは、「がんばっている人（たち）」
・ロッカールームでの大映写と、展示スペースでの「映像図書館」を、このテーマを中心に行う。
・大映写は、沢山の参観を見込める会員数の多い団体の映像映写。
・映像図書館は会員の今までの作品の中から上記テーマに合うものを集めて、その中から個人的に見てもらう。
・DVDプレイヤーまたはDVDレコーダーとテレビのセットを２－３セット並べ、ヘッドホンで視聴してもらう。会員をサクラとして、本当の客が来たらサクラは交代して頂く。

（６）撮影会について
・次の次（26年春？）　フリートーク
・何か食べに行っても？（以前黄檗山と普茶料理）
・秋の映像協会撮影会を１１／２４（日）に服部緑地で行う案あり。
・「郷愁」映像寝屋川の森口さんの作品を参考に見せて頂く。

（７）クラブ間（留学）制度の提案
・クラブごとに内容に特色があり、よいところを吸収する。
・各クラブの活性化と会員の技術向上を目的に、他クラブへ一定期間（たと

えば半年単位で）参加する。
・留学先の例会、その他行事に、留学先会員とともに参加する。
・会費は無料にするか､その期間の半額程度を臨時に支払うか。

（８）家族の病気等で退会された方の復帰
・映像寝屋川では、入会費を免除して再入会を考えている。
・同好会でも実績有り。

（９）今年の忘年会は　１２／１
・場所は？寝屋川市内にしてはどうか検討中。
・皆さんの感触は松心会館と市民会館以外の所、という感じだった。

（10）懐かしの8ミリ映画を楽しむ会９／１６（月）
・フィルムという限られた素材で作品を作っていた努力を見て上げて欲しい。

（11）映像フェスティバルは　来年５月31日（土）
・3月にはプログラムを決定するので、来年１．２月には作品を映写して検討する。
・各人作品の準備をお願いする。

（12）同好会ビデオ作品発表会
・26年秋～27年春となる。改めて相談。

３．映写・合評
（１）谷さん　「大自然のパノラマが待っている立山」　8分
・山の稜線を一列になって進んでいく人たちのシルエットが印象的。
・今回の作品はBGMだけなので、ナレーションは是非欲しい。

（２）谷さん　「当尾の石仏巡り」　7分
・最後のシーンは、人々が帰って行く後ろ姿の場面でENDにした方がよい。

（３）谷さん　「有馬温泉撮影会」　7分
・「撮影会」という題名が付いているが、内容は石田さんの回顧談と煎餅の２場面だけ。
・石田さんの当時の写真などを入れて、それだけで１作品になる。
・手焼き煎餅だけでなく、有馬の撮影場面がもっとあればよかった。

（４）新井さん　「かたな博物館をたずねて」　8分。
・これは「ふれあいフェスタ」出品作

（５）天野さん　「トロッコ列車　保津川下り」　9分
・これも「ふれあいフェスタ」出品作、制作年月が入ると古い作品、と言うイメージになる。ご本人はナレーションを作り直す、とのことだが、うまく行かない場合は現状で出品する。

（６）富田さん　「関宿」　約１０分
・これは未編集の撮影のままの映像。
・三脚があったほうがよかったのでは。

（７）富田さん　「礼文島」　約１０分
・これも未編集の映像
・長時間連続して撮影されているが、説明アナウンスを入れる、という意図が無いのであれば、写したい部分を絞って短時間の撮影を積み重ねた方が編集した場合良い作品になると思われる。

（８）映像寝屋川　森口さん　「郷愁」　７分４０秒
・これは１１月にと提案されている服部緑地撮影会のイメージを得るための参考作品。
・三脚を使えない（使用禁止と思われる）場所以外は、しっかり三脚を立てて撮影されている点に注目。
・パンやズームの処理に注目を。
・建物本体だけで無く、点景の花や草や昆虫などのアップも取り入れることを学んで欲しい。
・ナレーションがあるから撮影の意図も良く理解できる。言葉を練ることが大切である。

４．会員の当面する問題点質疑応答

５．来月の開催日　１０／１１（金）ワーキングスペースで。
・１１月は１１／１５（金）

６．次回のカメラ当番（佐伯さん）

旅　日　記

佐伯　節子

先日、従姉と二人で小豆島霊場会主催の、「小豆島八十八ヶ所　一日遍路旅」に参加した。以前から誘われていたが二人の予定がなかなか合わず、今回やっと実現したのである。

パンフレットによると、『「島四国」とも呼ばれ親しまれている小豆島八十八ヶ所霊場は、行程が四国霊場の約１０分の１の手軽さだが、霊験はあらたかとあって一年中多くのお遍路さんが訪れている。霊場はいずれも美しい自然の中に点在しており、なかでも山岳霊場は静寂森厳な山峡にあって、心身の疲れを癒してくれる。国指定の重要文化財や天然記念物も数多く、山岳霊場はハイキングコースとしても最適。車なら２～３泊、歩いてなら７～８泊の道程。』

年２回、８８の霊場を８コースに分けて歩くため4年がかりで完成らしい。行程が約１１Kmと比較的短く、終点が実家の近くということで選んだのだが、出発前にみんなに「そのコースはしんどいよ～」と散々脅された。

送迎バスでそれぞれのスタート地点に集合。私の参加する第８コースは男性4人女性5人。島の人もいたが、観音寺や岡山からの参加あり。全コースでは総勢２４０名の参加らしい。

先達さんの案内で４０番札所保安寺から歩き始める。途中で歩けなくなった人のために車が並走してくれるが、運転手は偶然にも小学校の同級生だった。驚いたのは、参加者がみんな白装束のお遍路さんスタイルだったこと（あたりまえか）。私はジーンズにウエストポーチ、リュックサック、登山用の杖。とても場違いで、いかにもハイキングに来ましたっていうスタイル。おまけに数珠も忘れて、途中の寺で買う始末。

今回は１４箇所の寺院を回るのだが、着いたらすぐに納め札をいれて般若心経を唱える。私は般若心経も経本を見なければ唱えられないし、色々カルチャーショックを受けた。

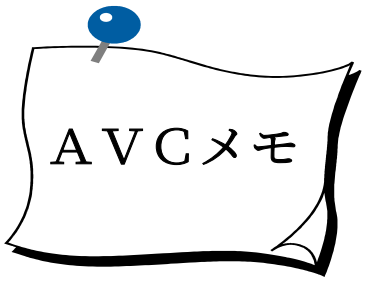
先達さんとは遍路経験豊かなツアーガイド？　名前と日付住所と願いを書いた『納め札』ってお参りした証拠？　寺の石段は左側通行。右側歩くのは偉いお坊さんだけ！？　橋では下に弘法大師さんが寝ていらっしゃるから杖をついてはダメ！　拝む時は帽子を取らないといけない。ただし菅笠は付けたままでいい。トイレと食事の時には輪袈裟は外す、などなど。

『お接待』といって、行く先々のお寺でお茶やお菓子を用意してくれる。昔は自販機も無かっただろうから、この接待は今思う以上に有難かっただろうな。

次に驚いたのは、私より年配者ばかりなのにみんな健脚なこと。最初に脅されていたとおりスタートからすぐに結構きつめの山道を登り、どうにか次の寺に到着。昼食後のだらだらと長い坂道もしんどかったが、先達さんは大分ペースを落として歩いていると言う。9月末でも暑くて汗みずくになったが、時々吹く風がとても心地よく、山の上から眺める景色は素敵だった。来たかいがあった。また行こう。

私の目的は、「初めての経験をビデオに撮って作品を作る」ことだったが、それはとても無謀だということがわかった。歩くだけでやっとなのに。カメラ撮っていたら更に遅れて迷惑かけた。

教訓：二兎を追うものは一兎も得ず。



８ミリ映画に想う

竹 田 幸 男

９月１６日に難波市民学習センターで開かれた大阪アマチュア映像連盟主催の「懐かしの８ミリ映画を楽しむ会」に参加して、改めて８ミリ映画全盛の時代を思い出しました。

ビデオから映像制作を始めた人には想像がつかないかもしれませんが、８ミリ映画というものにはずいぶん制約がありました。

第１は時間の制約、フィルム１本が約３分２０秒しか撮影できないので、それ以上の長い連続シーンが撮れないのです。１本写し終わったら、カメラの蓋を開けてフィルムを取りだし、新しいものと交換しなければなりません。この１本がメーカーによりますが現像代を入れると１本２～３，０００円以上かかったと思います。今の３，０００円ではありませんよ。給料数万円ぐらいの時です。１本たった３分２０秒ですよ！　当然、同時に金銭的な制約も受けることになります。今のように連続数時間撮影できること、データを消せば消耗は実質タダ、に慣れてしまった人には、想像もできない制約です。

また、光源の制約もありました。通常のフィルムが太陽光にしか適合していないのです。夜間の電灯光で写すにはフィルムを取り替えなければなりません。

そして感度の制約です。昼光色用フィルムの感度は、なんとＡＳＡ２５という低感度です。当時は写真用カラーフィルムでもＡＳＡ１００～４００あったので、それに比べてもかなり低い感度で、少し暗い所では写りません。電灯光用のフィルムはＡＳＡ２００でしたが、粒子が粗いのが難点でした。

今、ビデオで皆さんが何気なく使っているフェードイン・フェードアウト・オーバーラップは、大変手間のかかるものでした。これらはすべて撮影時に実行しなければならず、フェードイン・アウトはマニュアルで絞りを開いたり、閉じたり、オーバーラップは、撮影の終わりで絞りを絞っていって停止、次にフィルムを巻き戻して、ここぞ、と言う所から次のカットを絞りを開きながら撮影していきます。オーバーラップの場合は前後２つのカットを連続して撮影しなければならず、操作は手加減ですから、失敗したら２カットとも撮り直しです。結果が良かったかどうかは、現像して帰ってくるまでの数日間は判らない、というもどかしいものでした。写し終わってすぐ再生できる今では、編集で後からいくらでも修正できる今では想像もできません。

明るさや色合いを後から修正できる現在とは違い、これらは撮影時の一発勝負ですから、真剣に取り組まなければならなかったのです。

以上はほんの一例ですが、先人達はこういう制約をものともせず、すばらしい作品を残しています。フィルムも映写機器もどんどん使用不可能になっていき、こういう作品に接する機会は滅多にありませんが、機会があれば逃さずに見てあげて、使う手段が違っても、同じ目的に向かって一生懸命がんばった先輩達の努力を偲んで頂きたいと思います。 ■